

障害当事者のものがたりを聴く～人生七転び八起き～

京都頸髄損傷者連絡会相談役 エイブル・パフォーマンス集団「ガラ(柄)」代表 木村 善男

編集／京都光華女子大学健康科学部心理学科 大谷 多加志

大谷 (多加志) 大変お待たせしました。

今日のゲストスピーカーの木村善男さんをご紹介します。京都頸髄損傷者連絡会相談役およびエイブル・パフォーマンス集団「ガラ(柄)」の代表を務めておられます。エイブル・パフォーマンス集団「ガラ(柄)」は、障害当事者と支援者が協働して教材の開発、研修、研究などに取り組むグループです。

木村さんは、20歳のときに交通事故に遭い、そこで、生涯、車椅子生活になることを宣告されました。手足が二度と動かないことを知って、生涯を悲観し、自殺を考えたときもあるそうです。それから本当にさまざまな経過を経て、今日は、この辺りの話がたくさん出てくるかと思いますが、今では周囲の人たちから、「遊びの達人」とか、「充実した生活を送っていてうらやましい」と言われるような生活を送っておられます。趣味で活動的な日々を送る一方、障害当事者団体にも所属して、行政との交渉、障害者の防災、障害者の就労の場の開拓など、多岐にわたる活動をしておられます。

「振り返ると、人生、常に七転び八起き」と言っておられる木村さんの当事者の物語を、今日は聞かせていただければと思っています。木村さん、どうぞよろしくお祈りします。

木村 はじめまして。木村です。本日はよろしくお祈りします。

最初に、目の前にいる私がどのような障害があるかを話したいと思います。障害名で言うと「頸髄(けいずい)損傷」です。字のごとく、首の脊髄を傷めてしまった頸髄損傷者です。頸髄損傷は、さまざまな障害を引き起こします。

四肢麻痺とは、手足が動かないということです。もっと詳しく言うと、肩から上は動きますが、腕、腹筋、背筋が麻痺しています。腕は、どうにか少し動くという感じです。

体幹機能障害とは、自分の体位を維持できないことです。例えば、車椅子に座るときも、手すりを高くしたり、胸ベルトでしっかり留めたりしないと、ころんと転がってしまいます。今、横を向

いて話しているのも、背中にクッションなどをいろいろ挟んで維持していますので、崩れたらヘルパーさんに直してもらいます。

不随意運動とは、自分の意思とは関係なしに勝手に動いてしまう症状です。もしかしたら、今日も話している間に足がぼんと動いたりするかもしれませんが、自分の意思では全く動かせないので、勝手に動いているということです。

感覚機能障害とは、腕とか脇から下の麻痺している部分の感覚がない状態のことで、冷たいとか、熱いとか、極端な場合、骨が折れても痛みが分からない、気付かないということです。

体温調節機能障害とは、体温が調節できないということです。麻痺している部分は発汗作用がほとんどなく、汗をほとんどかかないため、一気に炎天下へ出ると体温が上がってしまうので、特に夏場は苦手です。

起立性低血圧とは、心臓から送られる血は、本来なら筋肉の運動がポンプとなって心臓のほうに戻っていきますが、麻痺しているので血が戻りにくいため、足に血がたまりやすくなり、当然、頭にも血が行きづらくなり、くらくらするという状態です。特に夏場は体温が上がって毛細血管が開き、血がすぐく下がりやすくなりますので、少し苦手です。

呼吸については、皆さんはあまり意識していないと思いますが、健常な人は横隔膜の収縮と胸の筋肉を使って肺を広げています。しかし、私は胸の筋肉が麻痺しているので、横隔膜の収縮だけでの呼吸になります。ですから、肺活量が少し少ないです。

あとは、低血糖症があります。血中の血糖濃度は自律神経が調節していますが、自律神経が不安定になり、その機能が少し鈍いので、極端ではありませんが、血糖値が下がることがあります。そのときはジュースを飲むなどして血糖値を上げます。例えば、こうやって話している間に血糖値が下がることも、たまにあります。そうすると、脱力感が非常に高まります。念のため、先ほどジュ-

スを飲んで血糖値を上げましたので、今は大丈夫だと思います。

排せつ機能障害もあります。やはり、排便、排尿は自力でできませんので、介助してもらっています。

さらに、自律神経過反射の症状があります。自律神経が何かの刺激で反応しやすいので、例えば、足の位置が少しゆがんでいるとか、尿がたまって膀胱が膨らんでいるだけで、冷や汗をかいたりします。そんなに極端にひどいことはありませんが、自律神経が不安定です。

頸髄損傷では、大体、このような感じのさまざまな症状が共通して出ます。普段は、こういうことはあまり言いません。なぜかという、説明すると、重病人扱いされたり、最近はましになりましたが、本当に気を遣って、「それじゃあ、あまりしゃべったら駄目ですよ」というオーラが出てしまうからです。

また、勘違いされて困ることもあります。こういった障害があると、もちろん、配慮は必要ですが、配慮が必要なことは、めったにありません。例えば、地域で段差があって、「ちょっとお手伝いしてくださいよ」と言うことはあるかもしれませんが、こういう症状や四肢麻痺があっても、ヘルパー派遣制度を使っていますので、別に問題はありません。それなのに、障害者と見ると、困った人の代表みたいに「困ってるでしょう」という見方をされることが多いです。こういう障害があっても、今の自分にとっては、これがもう当たり前です。「皆さん、配慮をお願いします」と言ったこともあることはありますが、配慮が必要なことは、めったにありませんので、その都度、言うわけではありません。

ですから、こういう障害の話聞いて、「ああ、やっぱり、障害って大変なんやな」とか、「困った人なんやな。手伝わなあかんのやな」という印象をあまり持たれたら困るので、基本的にこういう障害の話はあまりしません。しかし、今日は、目の前に居る障害者にどんな障害があるのかを知ってもらおうと思って話しました。

伝えたいこと

自分の中で、今日、一番伝えたいことが次のことです。自分自身の人生を半世紀以上生きてきたなかで、障害だけに限らず、ものごとの全てにおいて、マイナスとプラスは紙一重だと思います。例えば、障害一つとっても、障害のために、できることは確かに限られていますので、当然、皆さんにできることが私にはできません。しかも、私は中途障害なので、できていたことがもうできなくなったということで、当初は、自殺したいと思うぐらい本当にショックを

受けました。

しかし、今の生活でいうと、障害が軽度になったわけではありませんが、死にたいと思うぐらいショックを受けたわりに、「障害者になって、できること、楽しいこと、めっちゃ増えたやん」というのが現実です。

要するに、障害というマイナス面はもちろんあります。ただ、それだけをずっと意識して固執すると、できることも楽しいことも、結局、失ってしまうとか、それに気付けなくなります。今、「遊びの達人」とか、「ほんまに充実した生活を送ってはるな」と言われますが、障害自体は変わっていません。変わったことは、結局、できないことに固執しなくなったという、たったそれだけのことです。

今日は、自分自身の生活を伝えながら話をいろいろとするなかで、「障害だけに限らず、マイナス面に固執しないことで、生きることが本当に面白くなるよ」という話を皆さんに伝えられたらとは思っています。

私は、バイク事故を起こして障害者になったわけですが、実は、ヤマハの RZ250RR というバイクに乗っていました（バイクの写真を提示）。本来なら白地に赤色の車種ですが、これは限定仕様で、ちょっと見て、「あ、これがいいな」と飛びつきました。

こういう話をすると、大体、「バイクに乗っていたことを後悔していますか」とか、「バイク、見るのも嫌でしょう?」と言われますが、真逆です。今はバイクにはもう乗れませんので、逆に、乗っていて良かったと思いますし、全然後悔していません。私は、いまだにバイクのエンジン音が大好きで、皆さんからしたら、「うるさいな」と思うようなエンジン音でも、「何か心地いいな」と思うぐらいなので、マイナスイメージは全然ありません。

それはなぜか。今までいろんな活動をしてきた中で、特に障害者になってからは、もちろん、いろんな障害の人に出会いますが、結局、中途障害の人は特に、たまたま障害者になったと思っています。私はバイク事故ですが、では、バイクに乗らなかったら障害者にならなかったのかということ、交通事故やスポーツ事故だけではなく、普段の生活でも、転んだときに、たまたま首に強い衝撃を受けたりして、障害者になることはあります。

私と同じような、いわゆる頸髄損傷、脊髄損傷の人たちに話を聞くと、風邪をひいて、風邪の菌がたまたま脊髄に入って脊髄損傷になった人もいます。私のような頸髄損傷も、本当にいついかなるときになってもおかしくはありません。ほかにもいろんな障害がありますので、私は、たまたまバイクで事故っただけの話で、たまたまだと思っています。ですから、バイクは危険かということ、バイクも車も危険なものは危険だと思いますが、私のなかでは、マイナスイメージは全くありません。

事故当時の話

では、事故当時の話をもう1回したいと思います。話したいことは、いっぱいありますが、あっちこちに行くのが嫌なので、一応、流れを箇条書きにしたものを見ながら話します。

事故当時の話をします。私は当時20歳で、舞鶴高専（舞鶴工業高等専門学校）の電気科に通っていました。兵庫県にも明石高専（明石工業高等専門学校）があるので分かると思いますが、高校と短大がくっついたような五年制の学校です。

20歳だったので、卒業間近で、立石電機への就職が内定していました。立石電機は社名変更して、今はオムロンと言います。「オムロン」と聞けば、分かる人も何人か居ると思います。その当時、7月に内定が決まりましたが、結局、4カ月後の11月に事故ってしまいました。家が母子家庭で、親には苦勞をかけていたので、長男の私は、ようやく親孝行ができる、楽をさせてやれるという喜びがすごくありました。

37年前なので、インフォームド・コンセントは全くなくて、最初、しばらくの間は治ると思っていました。ですから、「早く治れ」という思いがあって、その時期は結構つらかったです。当然、就職の内定も取り消しになりました。ただ、治ると思っていましたので、つらくても、まだ将来のことを考えることができました。

たまたま私が入った病院は、大阪の星ヶ丘厚生年金病院（現・JCHO星ヶ丘医療センター）でした。そこには、今はもうなくなったみたいですが、脊損病棟があり、私と同じ頸髄損傷のほか、胸髄（きょうずい）損傷、腰髄（ようずい）損傷など、いわゆる脊髄損傷の人たちがたくさん入院していました。この病棟の人たちは、退院するときに、みんな車椅子で退院していきます。それで、「あ、治らないんや」と、もう二度と手足が動かないことを知りました。

当時の脊損病棟では、事故で入院している人が多かったのですが、みんな、「何で助かったんやろ。これから先、生き地獄やないか」と思っていました。もちろん、私もそうです。特に、親に楽をさせてやれると思ってた矢先でした。その当時、ヘルパー派遣制度はありませんので、「一生、親に面倒を見てもらうのか」とか、「手足が動かない生活って想像できないし、生き地獄や」と思い、大抵の人たちが思うように、「本当に、これはもう死ぬしかないな」と思いました。

その当時、死のうと本当に決意しましたが、手足が動かないと自殺もできません。「死ぬとしたら舌でもかみ切らなあかんのかな」と思って、歯で舌を1回かんでみましたが、「これ、かみ切れるかな」とか、「病院に入院しているから、かみ切っても、すぐ手術されるかな」とか、「またみんなに迷惑かけるかな」とか、そんなことがいっぺんに自分の中に入ってき

て、当初を振り返ると、発狂してもおかしくないレベルのショックでした。

そういうときはどうなると思いますか。あくまでも私の場合ですが、あまりにもショックが大きすぎたのが逆に良かったのか、実を言うと、「死ぬにも死ねない。何なん、これ」と思いました。その瞬間、防衛本能が働いて、勝手に現実逃避をしたようで、自分にとっての将来や夢や目標が一切なくなりました。

それを自分でただ考えたのではありません。例えば、「ああ、自分は手足が動かないから、もう将来ないな」ではなくて、瞬間的にすこんと抜けたみたいになって、逆に楽になったというか、将来のことも夢も希望も目標も何もなくなった瞬間に、そんなにつらくも苦しくもなくなりました。周りの人たちと接することはありませんが、要するに、普通にテレビを見て楽しんだり、食事を楽しむことができるようになりました。「つらくも苦しくも全くない」と言えば、うそかもしれませんが、そんなに大したつらさや苦しさはなくなりました。

障害受容のプロセス

障害の受容のプロセスについて言うと、今でこそ、このように元気にやっていますが、（事故から）10年たって、ちょうど30歳のときに気づきと変化がありました。

一つ目は、人間には、もともと心身ともに元気になるという自然治癒力があるということです。10年間、別に何かがあったわけではありません。最初は、分厚く硬い殻に閉じこもりましたが、自然治癒力なのか、それが少しずつどんどん薄く軟らかくなり、今まで一切入ってこなかった周りの刺激が少しずつ入りやすくなってきました。

二つ目は、家族が普段どおりに接してくれたことです。「家族はどう接したらいいんですか」とよく言われますが、家族が普段どおりに接してくれたことが、自分にとっては本当に良かったというか、すごくプラスになりました。焦らされたり、「頑張れ」と言われると、「分かってくれへんのに」と意固地になったりするでしょうし、逆に、「この子、かわいそうやな」と接せられたら、それこそ、「頑張るぞ」という気持ちにつながっていかなかったと思います。そういう意味では、普段どおりに接してくれたことは、自分にとってありがたく、本当に感謝しています。

三つ目は、ちょうどその時期に、いろんな人たちとの出会いがあったことです。それまでにも、いろんな出会いがあったと思いますが、本当にシャットアウトしていたので、ようやく、いろんな人との出会いを受け入れられるようになり、それが自分にとってすごくプラスになりました。

特に障害当事者団体との出会いで、中でも京都頸

髄損傷者連絡会には 20 年以上ずっと参加しています。京都頸髄損傷者連絡会は、もう 30 年以上活動している老舗ですが、「会員に入らなくてもええし、とにかくイベントでも遊びに来たら？」と何回か言われたので、「それじゃあ、1 回行ってみようかな」と行ってみたら、すごい衝撃を受けました。

例えば、運動会を開催します。「どうするねん」というのがあると思いますが、私は、その当時、電動車椅子を手というか、肩でどうにか操作する感じでしたが、パン食い競争に参加しました。そこに集まっている人たちは、すごく楽しんでいました。もちろん、そういうイベントだけを楽しんでいるのではありません。「こんな面白い楽しみがある」とか、「こういう仕事をしている」という話を聞いて、自分にとっては、それがすごい衝撃でした。「えっ、障害あるけど、何でこんなにみんな楽しんでるの？」とか、「えっ、障害あるけど、仕事してはるの？」とか、「えっ！」という衝撃がすごくありました。

そして、当然、「えっ、自分は何してるんやろ」と思いました。本当に対比というか、マイナス面とプラス面で、私はマイナス面しか見ずに、それに固執していたから、「できなくなった、できなくなった、できない、できない」と思っていました。同じ障害がある人たちの「別に、人生楽しんだらええやん。見つけたら仕事もあるで」という姿を見て、「あれ？何か、自分、損やん」と思いました。

もちろん、それだけではなく、いろんな人との出会いもあります。しかし、特に障害当事者団体との出会いは、すごく衝撃的でした。そのときに、障害があることのマイナス面に固執することと、「それはそれでええやん。楽しむことを楽しもうや」と考えることの違いをまざまざと感じ、ショックを受けました。

それから反動が来ました。今日の話にもつながりますが、例えば、振り返ると、私は（事故から）10 年間の記憶があまりありません。これを「生けるしかばね状態」と呼んでいます。だらだらテレビを見て、ただ食事をしていました。食事は一応は楽しんでいましたが、そんなにすごく楽しんでいるわけではありませんでした。そんな感じで、だらだらと 10 年を過ごしました。

すごく無駄な時間、無駄な人生で、もったいないなと思います。これも考え方です。「10 年間、もったいないな。何してたんやろ」と本当に思いました。逆にそれが良かったのかどうなのか、反動が来て、今度は、「楽しまな損やん。楽しんでやれ」という、貪欲に楽しもうという気持ちで、すごくプラスに働いたというか、その後は、いろいろと遊びに行き、仕事もいろいろ経験していますが・・・。

面白いなと思うのは、「時間をもったいないわ。遊ばな。楽しまな」と貪欲になることで、いろんなことにチャレンジするようになったことです。そうす

ると、できないことが多いからこそ、やればやるだけ、できることが面白くなりました。

私は、人前で歌を歌うのは大嫌いでしたが、今は、「木村と言えばカラオケ」と言われるぐらいカラオケが好きです。みんなが選曲に悩んでいるうちに駆けつけ 3 曲は歌います。このように、嫌いだったことが好きになりました。

また、もともと私は、どちらかという、文系というより理数系ですが、川柳とか、詩とか、童話とか、しまいにはシンガー・ソングライターをやってみたりとか、本当に貪欲にどんどん楽しむようになりました。

仕事に関しても、ヘルパー派遣事業所を運営したこともありますし、ヘルパー派遣事業所のコーディネーターの仕事をしたこともありますし、今は、「障害者ならではの仕事を開拓しても面白いやん」ということで、「ガラ（柄）」という当事者団体で代表を務めています。このように、今は仕事でもいろいろと頑張っています。

このような形で、「本当に、障害者になってからのほうが、めちゃくちゃいろんなことで面白いやん」と活動しています。

大谷 木村さん、ありがとうございます。

ここまでが前半部分です。ここで 5 分の休憩を挟んで、5 分後からまた再開します。（休憩）

こんなこともできるんだ

木村 はい。言葉だけよりも写真や動画を見ながら話ができたらと思っています。

障害があると、何かとできないことばかりが強調されますが、工夫すると、意外といろんなことができます。その部分が結構忘れられています。

これは、何十年も前の当初の頃の写真ですが、今は亡き母が右側に写っています。私は手を全く持ち上げられません。少し見づらいますが、これはベッドの上に杵を組んで、滑車や重りを利用したものです。肩は動くと言いましたが、そこにさらしをくくって手を乗せると、肩の動きで手を上下させることができます。

ボタンが押しづらいですが、これも病院で作ってもらいました。手首を固定して、ペンを持つものを手に付けて、ペンの先にゴムを付けると、全部のキーが押せるわけではありませんが、文章を打つことができます。ですから、最初はゲームを適当にやっていました。こんな感じで、工夫すると、意外といろんなことができます。

こちらの写真は、普段乗っている車椅子ですが、これは背もたれが高く、リクライニング式の車椅子です。こんな形で、起立性低血圧で、体調がちょっとくらくらするときにはこうやって倒すと、それだけで治ります。それこそ血がたまったら、

脚のほうまで上に上げるということで、体調管理は、皆さんより確かにいろいろと難しいですが、ここがまたマイナス面とプラス面で、体調管理が難しいからこそ、体調の管理をすごくしています。

例えば、日帰りで京都から東京ディズニーランドへ行くときは、始発に乗り、最後のエレクトリカルパレードを見て帰ってくるというのを車椅子で行っています。それで、別に体調を崩すことはありません。だから、体調管理が難しいからこそ、体調管理をしっかりしているので、目いっぱい楽しめるといふ捉え方もできるのではないかなと思っています。

今、車椅子にはテーブルが付いていますが、これは、実を言うと、自分の手が重たくて肩が凝るというか、本当にきんきんに張って痛くなるので、自分の腕を載せて、首や肩の負担を減らす目的があります。テーブルで体調を管理しています。

この写真を見てください。どこか分かりますか。これはボウリング場です。板とか置いてあるのは、実は、ボウリングをするにはどうしたらいいだろうというので、これは板で作ったものです。今でこそ、ボランティアはすごく少ないですが、昔は、ボランティアと一緒にいろいろな企画を楽しんだりとか、こういうものも木を買ってきて横にゴムをはめてボウリングと一緒にやりました。

一緒にというのは、例えば、「健常者も障害者も一緒にできるやん、これやったら」という部分で、車椅子使用者は車椅子でそのまま来て、その板を膝の上に載せる。健常者もパイプ椅子を持ってきて板を載せて、一緒にやってみてという部分で、こんなふうにもいろいろ楽しんだりします。これも頸損（頸髄損傷者）連絡会で、活動をしているイベントの一つとしてやっていました。

この映像はグライダーです。みんなは本当にいろいろな遊びや仕事をやっていますが、「グライダー乗ってんねん」という人がいます。同じ頸椎損傷でも腕とか私よりもっと動く人もいますので、こんな感じで、教官が後ろについて自分で操作します。グライダーはエンジンがなくて、プロペラがなくて、「何なの？ どうするの？」というのがあります。

この写真は京都ではなくて、車を借りて、岐阜まで行ったときのものです。たこ糸のような感じですが、ワイヤーを付けてローラーでくるくると回して浮力で浮いて、浮いたらワイヤーを外して飛びます。ロバに乗っている感じで、ちょっと怖いといえは怖いですが、とことこと微妙な揺れが面白くて、「ああ、こんなこともできるんや」と。みんなが楽しいと思うことを、「ああ、ほな、やってみる」と、だから、そういう意味でも楽しいことが増えてきたという部分もすごくあります。

貪欲に楽しむ

みんなが、「楽しい」と言うと、すぐ手を出してしまいます。必ず楽しいかという、そうでもありません。でも、反動で、貪欲に楽しむ精神がすごくプラスになっているのか、結構なことにいろいろチャレンジすると、面白い。すると面白いというので、趣味が増えてしまっています。

最初の趣味は、事故から10年ぐら経つ中で、それまで近所のおばさんとあまりつながりはなかったのですが、会話がが増えてきて、「新聞に川柳とかをちょっと投句してみたら」とか言われて、「じゃあ」と言ってやってみました。朝日新聞に川柳が4句載っています。

難しいことはできないけれども、時事ネタで、「5・7・5」だったら何か面白いのをいろいろ考えていたら、「は」や「を」や「に」をちょっと変えるだけで違うことに気づきました。例えば、「事件で使われた拳銃を神田川に投げ捨てた」という自供をもとに大勢の人が神田川をさらっていたニュース映像を見て、「神田川少しはきれいになったかな」というのを書いたら新聞に載りました。

「やってみたら面白いやん」ということがどんどん増えてきて、こういうのをやってみたら、何か文字って書けるんだなど。私はもともと、教科書以外、本当に漫画しか読んだことがないので、川柳とかそういうのは苦手でしたが、「何か詩とかは書けるんちゃう」とか思いました。特に、初期の頃なので、本当にやれることが少ないと思ったので、まず、書くことから、「川柳面白い」、「文字って面白いやん」、「文章って面白いやん」という気持ちで詩を書きだしました。

この詩を作ることが結果的にはすごく良かったかなというのは、今の自分というのを見つめる、自分の中で何かもやもやしている部分、「こんでええんかな」という部分を、自分で詩を書いて、自分に後押しするような、背中をぽんとたたくような感じ「こんでええんかな」という思いになったことです。

例えば、「だるまとかは倒れても倒れてもすぐに起き上がる、僕は倒れたままだ」という詩は、同じ障害のある人でもどんどん活動しているなかで、「ほんま、これでいいんかな」と、自分自身を見つめ直す詩になり、ちょうど良かったのかなと。

また、エレクトーンの先生に出会ったときに、シンガーソングライターに急になってみたいと思いました。「コード進行って何？」と全然知らないんですけど、もうゼロから始めて、やっぱり道具、パソコンとかがあるとすごく楽というか、いろいろなことができるなと音符を打ち込んだら、勝手に出てきました。

それで1回、自分で「恋は気まぐれ」という歌を作ってみたり、歌詞を書いてみて、鼻歌で歌って、音符

を拾ってみます。音符を拾うのもなかなか難しいけれども、「いや、音、こんだけ離れてるで、もっと離れるで、もっと高いで」とか、アドバイスをしてもらって、歌を作ってみたりとしました。

食欲に楽しむと、「楽しい、楽しい」とどんどん思っていると、「好きこそ物の上手なれ」かもしれないけれども、ヴィックスヴェポラップの「オヤスミ童話集」というのがあって、それに応募して、入選はしなかったけれども、最終選考に残ったということで、ここにも、「消えた赤色（木村善男）」と載っています。何かいろいろ考えたりして、それを形にして作り上げて、本当に面白いです。

人とつながることの楽しさ

次に、2分ほどの動画ですが、これも、「ユーチューバーって面白そうやな」という部分があって、2年ほど前からユーチューバーもやっています。過去のデータとかもったいないから、いろいろアップしていました。さっきの歌です。作詞作曲して自分が歌っていますが、ちょっと気恥ずかしいですが、ちょっと聞いてください。

(動画再生)

木村 といった感じなので、また、チャンネル登録をしていただけるとうれしいです。いろいろ活動をしていると、声がいろいろとかかってきます。これは、NHKのもうなくなっていますが、「きらっといきる」と言う番組に出たことがあります。今、その後、「バリバラ～障害者情報バラエティー～」という番組に続いていると思います。いろいろ活動していると「出てみないか」とお声がかかり、障害者と介助者の関係性というテーマで話しました。

つながっていることの面白さということでは、地域の近所の子どもたちとかと付き合いがあります。この写真はだいたい前になりますが、夏祭りやクリスマス会の時のものです。ホームパーティーとかが好きなので、かき氷を買っていたりとか、たこ焼き、焼きそばとかを作ったりして、みんなで集まってにぎやかに楽しんだりします。地域で暮らすというのが、やはり、こういう近所付き合い、特に、子どもたちの成長を楽しむというのが自分の楽しみの一つになっています。

ただ、去年から（コロナ感染状況により）夏祭りやクリスマス会はやめておこうかという状況です。これまでは地域とのつながりが結構あり、子どもたちと大人で20人以上集まっていました。その楽しみが、今は全然できていないので少し悔しいと思います。

みんなに言われると、つい乗って、いろいろな活動をやってしまいます。スキューバダイビングをやっている人がいて、「やってみたら」と言われ

て、「スキューバダイビングってどうできるの?」というので、でも、そこは探すのも面白いですね。ネットでいろいろと調べて、沖縄のほうでできるみたいだということで、沖縄でやってみようかなと。ほんのちょっとですが動画があります。

(動画再生)

木村 実は、これは本当に大変でした。今、立ったような状態で海に入っていました。普段、うつぶせはしないので、うつぶせになると呼吸困難というか、肺が押しつぶされるのではないけれども、何か苦しくて、「ちょっとうつぶせになれないんですよ。立ったままやったら、どうにかいけるんですけど」と言ったら、「じゃあ、立ったままはどうにか海に入ろうか」というので、いろいろとやってみてもらって、立った状態だったら息苦しくもなかったの、参加できました。スキューバダイビングは、今まで2回しています。

これはハロウィンの写真です。渋谷のハロウィンも今から4年前に、「渋谷のハロウィン、面白みたいやん」と言われたら、「あ、そう。1回行ってみるわ」と言って、4年前に1回行って、めっちゃ面白くて、毎年参加していますが、さすがに去年はコロナ禍の関係で行きませんでした。だから、4年前、3年前、2年前と3年連続で行っていますが、去年も今年もちょっと無理かと思っています。

渋谷ハロウィンは、大体アニメ系か、ゾンビ系かという部分で、アニメ系は思い当たらなかったの、ゾンビと。いろいろ調べてみると、ちょっとしたゾンビが多いけれども、リアルゾンビが少なかったの、「どうせやったら、じゃあ、目立ってやれ」と、車椅子使用者なので目立つんですが、リアルゾンビを目指して、この写真がちょうど2年前の最新のものです。

次は、もっともっとリアルにやってやろうと思っていますが、今年もちょっと無理かなとは思っています。というような感じで、本当にごく一部ですが、こんなふう楽しんでます。という感じですが、このところで、1回、質疑応答にそろそろ入ったほうがいいですか。

質疑応答

大谷 そうですね。はい、ありがとうございます。そうしたら、せっかくの機会ですので、質問があれば、この機会にしようと思っていますが、参加している学生の皆さん、この機会に何か聞いてみたいことがあるら、直接、またはチャットのほうに連絡してください。

木村 今回の話に関係なしでも、何でも言ってください。答えられるかどうかは分かりませんが。さてさて、どうですか。

大谷 今、質問が1つ挙がってきました。「行動力の

秘訣などがあるかを聞きたいです」ということです。

木村 あえて言うなら、「楽しもう」という姿勢です。一般論的にも、例えば、お笑いを見に行っても、「お金払ったから、さあ、笑かしてくれ」と思うのと、「いやあ、何か楽しもう楽しもう」と行くのと全然違うというのは、自分で何となく思います。だから、どうせだったら楽しもうという思いを持っているのが、すごい原動力かなと思っています。

だから、同じことでも、例えば、趣味の話でもそうですが、「川柳なんて」とか、「ふーん、詩なんて」、「童話なんて」と思わず、「何か楽しいんちゃうの。楽しんでみようか」と思います。「楽しんでみようか」とやるから楽しいです。自分は半世紀以上生きていますが、自分の過去を振り返ってそう思います。だから、「楽しんでやれ」と、「どうせやったら、楽しんでやれ」と思うのがすごく原動力になるかなとは思っています。

大谷 次の質問です。

木村 はい、どうぞどうぞ。

大谷 「今、一番夢中になっていることは何ですか」という質問です。

木村 本来なら、私の中では渋谷ハロウィンです。今、パワーアップでアイデアばかり浮かんでいます。

あとは、先ほどどちらと言いましたか。障害者ならではの就労というシステム化できたら面白いかなというのがあって、それに力を入れています。力を入れるというより面白いかなと思っています。最近、女性が強くなってきていますが、それは、経済的自立も関係するのかなと思っています。障害者は就労がなかなか難しかったり、「福祉的就労」と言って、時給100円ぐらいのこともあったりもします。

そこで開拓するのに、健常者と対等だとしんどい部分があるので、障害者だからできる仕事をどんどんシステム化していったら、経済的自立ができて、それこそ、障害者に対するマイナスのイメージはかなり減ってくるのかと思っています。そこを死ぬまで頑張りたいというのはあります。

大谷 もう一つ質問が来ています。

木村 はい。

大谷 「仕事について、現在どのようなことに従事しているか」、それから、「仕事にはヘルパーさんとかも付いていますか」という質問が来ています。

木村 ここがまた難しいところです。例えば、仕事でヘルパーは使えません。でも、それは問題視されて、今改善されつつあります。例えば、私自身、生きるためにヘルパーを使います。ただ、「生きるためだけに使うんやったら、その生きるために使う時間を仕事してもいいんちゃうの？ヘルパーを使って」という部分があります。

でも、今のヘルパー派遣制度では重度の障害の

方のための重度訪問介護という種類のサービスがあります。重度の障害の方に対しては、いろいろと配慮しようという動きは、今出ているので、使えることもあります。基本は使えません。だから、私とその仕事をしてきたのも、ヘルパー派遣事業所を運営したりとか、そんな感じです。

コーディネーターも研修用の資料を作ったりとか、自分自身が研修のモデルになったりといった感じで、基本、ヘルパーは使えません。でも、重度の方には使えるような方向で、今、制度はちょっとずつ作り出されているという感じです。

大谷 ありがとうございます。チャットのほうからの質問はもう一つ、清水先生からの質問です。「心理学を学ぶことについてどのような意味があるとお考えでしょうか。心理学を学んでいる学生にとって、何を考えることが大事でしょうか」ということの意味を聞きたいということです。

木村 机上の論理というのは絶対必要だとは思いますが。というのは、リアルに体験したことをじっくり、しっかり考えることはとても大切なことだと思います。ただ、私も考える時間はやっぱり多いです。考えるというのが、いろいろな方向性で見たりするのも大切なことです。逆に言うと、机上の論理だけでは駄目だし、リアルに現実にいるいろいろな体験してというだけでも駄目だと思います。

私も心理学自体よく分かっていないけれども、そういう意味で、リアルにいろいろなことを体験して、体感して、その中でいろいろな方向性で、いろいろな分析の仕方をして、「ああ、なるほど」という部分はとても大切なことだと思います。だから、リアルがあっての心理学だと思うので、心理学だけ学んで、「できましたわ」というのは絶対にあり得ないと思うという答えでいいですか。

大谷 ありがとうございます。終わりの時間もそろそろ近づいてきました。

私自身もこれまで心理学を学んできた立場として、やはり、人の心について考えていくときに、どうしても自分の想像の範疇でしか相手のことを想像できないという、その限界というか、その部分をとっても感じるがありました。やはり、いろいろな立場の人、自分とは違う経験をした人の話を聞くことはさまざまな意味での学びになるなと思っており、この授業の中でも、そういう意味で、木村さんに話していただく機会がぜひ持てたらと思い、無理をお願いしてこのような機会を持ちました。

とても貴重な機会をいただけたと思っています。木村さん、本当にありがとうございます。秋山先生も本当にご尽力いただいて、ありがとうございました。最後に、あらためて御礼申し上げたいと思います。

最後に、木村さんに拍手をお願いします。木村

さん, どうもありがとうございました。

木村 ありがとうございました。

(終了)